

2019 年度

国 語

(1 期)

(答はすべて解答用紙に記入すること)

(時 間 45分)

番 号		氏 名	
--------	--	--------	--

〔一〕 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(字数制限のあるものについては、すべて句読点や記号をふくみます。)

(注¹)
アテネの若者と共に帰還したテセウスの船は、アテネの人々によって大切に保管されました。(注²)

テセウスの船は、腐った部分があれば新しい木材と取り替えられながら、長い年月にわたり大切に保存されました。テセウスの船を作った職人の技術は受け継がれ、当時の手法で、当時の設計図のもと、慎重に修理されてきました。

気がつけば当時の木材はすっかり取り替えられてしまい、現在のテセウスの船のどこにも残っていません。

ある人は言いました。

① 「これはもはやテセウスの船とは言えない。テセウスの船に使われた木材はどこにも残っていないからだ。当時の船をテセウスの船と呼ぶのなら、その時の木材はどこにも残っていないのだから、これは別の船だ」

別の人は言いました。

「いや、これはテセウスの船だ。なぜなら、テセウスの船が、テセウスの船として保管され、その目的で修理が繰り返されてきたのだ。修理されたテセウスの船を見た人は『これはテセウスの船だ』と言うだろう」

職人たちはすべての木材を取り替えたのだから、取り替えられた朽ちた木材を使ってもう1つの船ができるのではないかと考え、取り替えられた木材を組み立てなおし、もう1つのテセウスの船を作り上げました。

ポロポロの船ですが、使われている木材はまさしくあの伝説の船テセウスのものです。

2つの船を見た有識者たちは、どちらが本物のテセウスの船なのかを議論し始めました。

ある人は言いました。

② 「これはまさしくテセウスの船だ。朽ちているとはいえ伝説の船テセウスに使われていた木材でできているのだから、当然これこそがテセウスの船だ。修理されたほうのテセウスの船はレプリカなのだ」

別の人は言いました。

「いや、これはテセウスの船とは呼べない。なぜなら、修理されてきた本物のテセウスの船があるのだ。ずっとここにあり、修理が続けられて

きたテセウスの船の隣で、突然今日、テセウスの船がもう1つ現れました、では困る。

もし、これが本物のテセウスの船と言うのなら、去年、一昨年とここにあつたテセウスの船は偽物なのか？ どの時点で修理されてきたテセウスの船が本物でなくなったのか？」

本物のテセウスの船はどちらでしようか？

この話の元になっているのは、ローマ帝国のギリシア人倫理学者であり作家のプルタルコス（英語名プルターク）による伝説として今に伝わる有名な話です。

この思考実験で問題となってくるのは、何を基準に伝説のテセウスの船と同じものであるのか、ということです。

すべての部品や木材が新しいものに取り替えられても同じものと呼べるのでしょうか。

そもそも同じとは何を基準に考えればいいのでしょうか。

例えば、あなたが手に持っているこの本と同じ本はどこかにありますか？ と誰かに聞かれたとしたら、あなたは、アマゾンなどのネットショッ

プや本屋で売っているのではないかと伝えるでしょう。

しかし、本当にあなたが手にしている本と同じ本であるといえるのでしょうか。

この場合はネットショップや本屋で同じタイトルの本を手に入れることができれば、同じ本が手に入ったと考えて問題はなさそうです。テセウスの船で言うと、復元されたテセウスの船のように、あなたの持つ本そのものの紙が使われている必要はないでしょう。

あなたがある本を本屋に持って行き、「この本と同じ本をください」と聞いたとして、本屋の店員が「その本と同じ本はあなたが持っているその本以外にはありません」と答えたら、この店員は何を言っているのだろうと疑問に思うでしょう。

次に、あなたの持っている本が有名タレントの本で、そのタレントがあなたに向けて書いたサインが入っているとしましょう。

本屋に行ってそのサインを見せつつ「この本と同じ本をください」と言ったとしたら、先ほどの「その本と同じ本はあなたが持っているその本以外にはありません」という言葉が **1** に感じられます。少なくとも書店に置いてある本とあなたが持っている本は **2** であると多くの人が

判断するでしょう。

時と場合により「同じ」という言葉の持つ性質は変化するのです。

では、テセウスの船の場合、何をもって同じと言えはいいのでしょうか。船に話を絞って「同じ」を考えてみます。

毎日午前十時に、A地点からB地点に向かって出航する船があります。

あなたは六月十五日にその船に乗ってB地点に移動し、近くのホテルに泊まりました。翌日、あなたの家族が同じ船でB地点に到着し、あなたと合流しました。

3

このときの「同じ」とは、
という性質を表しているのであって、今日の船と昨日の船であってもまったく問題はないでしょう。私たちはそれでも同じ船と呼ぶはずです。

本の話でいうと同じ目的で使うことができるので同じ船ということになります。

●修理されたテセウスの船が本物

ここから考えると、テセウスの船は修理されたほうの船を本物と考えるべきです。なぜなら、最初のテセウスの船と同様の機能を保ち、同じ仕事ができるのは修理されたほうの船だからです。

【ア】当時のテセウスの船のように海に浮かび、動くことができるのは修理されたテセウスの船であり、復元されたテセウスの船は海に浮かべればすぐに沈んでしまうでしょう。

さらに、修理されたほうのテセウスの船は、テセウスの船がアテネに現れてからずっとそこにあります。

少しずつ少しずつ手が加えられ、多くの人が伝説のテセウスの船を守ってきたのです。年月の経過とともにその船は今日にいたるまでそこに存在していたということは、誰もが疑わない事実です。

もし、復元されたほうのテセウスの船が本物と言うのなら、テセウスの船を守ってきたすべての労力を否定することになるでしょう。【イ】

●復元されたテセウスの船が本物

ある調査員が、アテネの若者と共に帰還したテセウスの船に遺された痕跡から、当時の歴史的な背景を調べようとしたとき、どちらの船を調べればいいでしょうか。

もし、調査員が、修理されたテセウスの船を調べ始めたとしたら、その船は違う船だから……と指摘されるでしょう。歴史的なことを考える時は当然、元の木材で復元されたほうのテセウスの船を本物とみなし、^④そちらを調査すべきです。

先ほどの本の話で考えると、質を基準に同じ本を考える見方です。同じ本は世界にただ一冊で、同じ材質の紙を使って、一字一句違わない文字が印刷されているように、同じ本とは呼べないという考え方です。

さて、別の見方も考えていきましょう。あなたは海で遭難しているところをある漁船に助けられました。

後日、海を眺めているとその漁船と見た目が極めて似ている船が見えました。「あなたを助けた船と同じですか？」と聞かれたら、あなたは「船種は同じのようだ。同じ船とは限らないね」と答えるでしょう。

【ウ】船種が同じであろうと、あなたを助けたただ1つの船以外は違う船です。形がそっくりであろうと違う船ということですが。

テセウスの船で考えると、助けた船を修理したところでその船であることに変わりはありませんから、木材がすべて修理で入れ替わっていたとしても修理された船は確かにあなたを助けた同じ船です。

しかし、復元された船には、助けられたときついたであろう傷が残っているかもしれませんし、確かにあなたが足をついた木材は復元された船にのみあるものです。

どちらも助けられた船と同じ船と考えたくなりますね。【エ】

このように、何をもって同じとみなすかによって、答えは違ってきます。

時と場合により「同じ」は変化します。

種類の違う「同じ」を比べたために、テセウスの船は難しい問題となってしまったわけです。あなたの価値観や判断基準によって、テセウスの

船の答えは変わってくるのです。

(北村良子著『論理的思考を鍛える33の思考実験』より一部改変)

(注1) アテネ…古代ギリシアの都市国家。

(注2) テセウス…ギリシア神話に登場するアテネの王。怪物ミノタウロス退治の時に船を用いた。

(注3) 有識者…専門知識が広く、経験もある人。

(注4) レプリカ…複製。

問一 — 線①～④の指示語はどのような「テセウスの船」を指していますか。次の中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

- ア 新しい木材で修理され続けているテセウスの船
- イ 当時の木材で復元したボロボロのテセウスの船
- ウ それ以外

問二

1	2
---	---

 には、どのような言葉が入りますか。次の中からもっともふさわしい組み合わせを一つ選び、記号で答えなさい。

- | | | | | |
|---|---|----------------------------|---|------|
| ア | 1 | 正しいもの | 2 | 同じもの |
| イ | 1 | 間違 <small>まちが</small> ったもの | 2 | 同じもの |
| ウ | 1 | 正しいもの | 2 | 別のも |
| エ | 1 | 間違 <small>まちが</small> ったもの | 2 | 別のも |

問三

3

 にはどのような文が入りますか。具体的に二十五字程度で答えなさい。

問四 本文には次の文がぬけ落ちています。元にもどす時、「ア」「イ」「エ」のどこに入れるのがもっともふさわしいですか。一つ選び、記号で答えなさい。

本でいうと、サイン入りの本と似ています。

問五 ――線「修理されたテセウスの船を見た人は『これはテセウスの船だ』と言うだろう」とありますが、なぜそう言えるのですか。本文全体をふまえて答えなさい。

問六 本文では「本」や「サイン本」、「船」という例が挙がっています。それぞれの例が「テセウスの船」のように、意見が分かれないうのはなぜですか。それを説明した次の文の【 】に入る語を、文中から十字以上十五字以内でぬき出して答えなさい。

その場における人々の【 】という判断基準が共有され、統一されているから。

問七 次のア～オの文について、本文から読み取ることができる内容として、合っているものには「○」と、合っていないものには「×」と、それぞれ答えなさい。(ただし、すべて同じ記号で答えてはいけません。)

ア サイン入りの本に対する考え方は、世界に唯一（ゆいいっ）の存在であるという意味において、復元されたテセウスの船よりも修復され続けたテセウスの船を「本物」とする考えに似ている。

イ たとえ当時と同じ手法、設計図を使っても、木材が別のものであることから、修理され続けたテセウスの船を「本物」と呼ぶのは間違っていると考える人もいる。

ウ 同じタイトルや内容の本を「同じもの」と考えるのは、それはどちらの本も同じ機能をはたしているという考えによっている。

エ 本来のテセウスの船と同じ機能をはたすのはどちらであるか、という価値基準が当時からあれば、古代ギリシア人の論争にも決着がついた。

オ 修理し続けてきたテセウスの船こそ「本物」とする考えの根拠（こんきょ）の一つには、その船を長年テセウスの船として大切にしてきたという人々の思いもある。

〔一〕

次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

フー子は母方のいとこ、マリカからの誘いを受け、久々に母の故郷、汀館を訪れた。マリカと会えないままに祖父の家で数日を過ごし、その間、フー子は祖父の家で不思議な体験をする。その体験の謎を解こうと動き出したフー子は、偶然、マリカのいとこにあたる映介と出会った。フー子は不思議な体験のことは秘密にしつつ、謎を解くカギとなる懐中時計について、映介と一緒に調べ始めた。

その二日後、とうとうマリカから電話がきた。海に行っていたことなど話したあとで、

「そういえば、エーちゃん、そこに行つたんだって？」

と、マリカはそこだけ高い声で言った。前よりもずいぶん親しげな感じがした。自分のいとこが、自分のもう一方のいとこに会つたというのは、やはりどこか面はゆく、それでいて、たがいに親しみも増すのかもしれない。

「映介くんから、何か聞いた？」

フー子も友達に話す口調で、受話器に口を近づけ、ささやくように言った。映介がマリカに時計のことを話していて、マリカが興味をもっているなら、話がしやすいと思った。

「うーん、聞いたのはねえ、史料館に用があつたから、ついでにおじいさんの家によってお昼をよばれたってことだけ、ちゃっかりしてるね」

ゆっくりした調子でそう言うと、マリカは、

「フー子ちゃん、こつちに来ない？ こつちで遊ぼう？」

と誘った。

汀館に来てから、初めての遠出だった。

フー子は、祖父におそわつたとおり、バスに乗り、十文字街というところで市電に乗りかえ、四十分近くも揺られてから、杉森町という電停で降りた。

麦わら帽子をかぶった日焼けしたマリカが、花屋の前で、笑ってひらひらと手を振った。

ふたりは、太い並木道を歩いた。まっすぐにつづく気持ちのいい道だった。マリカはとてもやせていて、そのくせ、フー子よりずいぶん背が高かった。並んで歩いていると、フー子は、自分がまるで、どしんと重苦しい身体を引きずっているように感じて、ちよつと居心地が悪かった。そのうえ、間近で見るとマリカの目は、おどろくほど大きく、長いまつげに縁どられているので、フー子はいドキンとした。電話では、あんなに気安く話せたのに、急に、ひけめのようなものを感じて、フー子は緊張した。

「あの子、ちよつと変わってたでしょ？」

と、マリカが、かすれ声で言った。

「あの子って、映介くんのこと？」

「うん。あの子さ、中学二年のわりに、けっこう生意気なんだよね」

マリカは、独特の節まわしで、のったりとそんなことを言った。「X」と言わずに、生意気だというのが、なんだかおかしかった。自分は小学生なのに。マリカは、手をのばして、街路樹の葉を一枚取ると、それをちぎりながら、

「でもね、今日から同好会の人たちと、蝶ちよを採りに行っちゃってるから、今はいいの。中学生なのに。大人の同好会に入ってるのよ。あのね、エーちゃんのこしらえた蝶ちよの標本、きれいよ。フー子ちゃんに見せてもいいって。フー子ちゃんのこと、きつと気に入ったのね。普通は、さわっちゃだめっていうもの」

と言った。

そう言われて、悪い気はしなかった。だが、映介がいないというのは、マリカにだけ、あのことを話せるということだ。それは、ちよつとうれしいことだった。三人で秘密をもつより、Aマリカとふたりでもつ方がいい。

並木道に面した、立派な門扉の前で止まると、マリカは慣れた手つきで、それを開けた。門には、「蠣崎恭之介」と「蠣崎浩平」というふたつの表札がはめこんであった。映介の祖父と父の名前だろう。どちらも、フー子にとっては、初めて見る名前ではない。

(中略)

マリカは、映介の部屋にフー子を案内した。ごちゃごちゃした、物にあふれたような部屋だった。中学生とは思えないほど、本が並んでいた。「そこらへんの厚い本は、伯父さんがみんなのために買ったんだって。それなのにエーちゃんは、いちばんよく見る人のところに置くべきだって言って、自分のものにしちゃったんだって」

とマリカは言った。それは、学校の図書室でしか見たことのないような絵画全集だった。昆虫や植物の図鑑もいろいろあった。なんとか殺人事件、なんとかの謎、なんとかの惨劇、といったような物騒な題の本もずいぶん並んでいる。本などまず読まない兄の部屋とは大ちがいだ。

「エーちゃんて、好きな物がいっぱいあるの。虫でしょ、絵でしょ、推理小説でしょ、それに、天体望遠鏡も持つてるし。レコードも持つてる。……ほら、これが蝶ちよの標本。きれいでしょ？」

マリカは、棚から標本箱を取りだして、フー子に見せた。ガラスおおいのついたケースの中に、ジャノメチョウやシジミチョウが、羽を広げ、きちんと縦横に並んでいた。学名、和名、という小さな紙が貼りつけてあって、まるで大人の専門家が作ったものに見えた。部活、部活と騒いで、帰ってくるなり汚らしい格好のままひっくりかえって、母を怒らせている兄とは、ほんとうに何とちがうのだろう。映介を知る前にこの部屋に入っただけなら、なんだかキザっぽい中学生だと思っただけかもしれないが、もちろん今では、そうは思わない。映介の抱えている世界に、目を見はるばかりだ。

「だけどさ、この標本、こんなふうに並べた方が、もっとういと思わない？」

マリカはそう言って、一冊の本を棚からぬくと、ぺたんと床にすわって、中ほどのページを開いた。フー子も同じようにすわると、本を受けとった。そこには、色とりどりの蝶が、中心に向かって円を描くように並べられ、さながら美しいテーブルクロスのような模様を形作る、大きなカラー写真が写っていた。

「エーちゃんに、こうやればって言っても、そんなの、『じじい』の悪趣味だって言うの。だけど、『じじい』なんか、蝶ちよの模様のスカートもはかないし、刺繍したバッグだって持たないじゃない？ どうしてなんだろ」

マリカは、片方の膝を抱えながら、首をかしげた。

「んん……」

フリー子は、その一見美しい写真を見ながら、マリカに同意はできなかった。模様や刺繍ならば、きれいだと思えても、それが、死んだ生き物で作られているとなると、やはりぞっとしない。それを、喜びながら、美しく美しく並べていくのは、B、「ひっひっひ」という声の似合う気味の悪い『じじい』のすることだと、フリー子も思う。

(マリカちゃんて、変わってる……)

フリー子は、何かまったくちがう感覚でものを考える相手と向きあっているような気がした。

(でも、どっちだって、生き物を殺して並べてるんだし、それなら、どう並べたって同じことなのかしら……)

「フリー子ちゃんたら！」

とマリカが呼んだ。

「せっかく遊びに来たんだから、はやく遊ぼう？」

フリー子も、そうだ、あのことを話さなければ、と思った。フリー子は本を置くと、マリカと向きあうように、きちんとすわりなおした。

「ねえマリカちゃん」

そうきりだと、フリー子はドキドキした。C、望んでいたとおり、マリカとふたりきりで、あの話をするのだ。

「あのね、すごい秘密の話があるの。まだだれにも話してないの。信じられないけど、ほんとうの話なの」

フリー子は、思いつめたようにマリカを見た。マリカは、白い靴下くつ下についたフリルをいじりながら、

「どんなこと？」

ときいた。

そのきき方が、あんまりあつけないので、フリー子はちょっと気がぬけた。それでも思いきって、踊り場おどばからつづく階段、もとはドアだった壁かべ、そこにかかる懐中時計のことを話したのだった。

「懐中時計ねえ……。それね、ここの家のおじいさんも持ってるわ」

とマリカは言った。

「あ、そう、それでね……」

フー子は、それがすっかり錆び^{さび}びていて、開けようとしても絶対に開かないのに、ひとりでに開き、花に変わったのだと話した。そのところを早く言いたかった。

「へえ、おもしろいねえ」

とマリカは言った。あいかわらず、フリルをいじっていた。糸がほつれてきているのだ。

「そしたら、窓の向こうに、お庭みたいなのが見えたのよ」

マリカは、さぞ驚^{おどろ}くだろうと思った。

「フー子ちゃん、入って見たの？」

とマリカはきいた。フー子は、マリカとのやりとりが、なんとなくしっくりこないように感じながらも、それに答えた。

「うん。でも、それは二回目^⑤のとき。蔓草^{つづみくさ}みたいなのが、いっぱい生えてて、道があちちにもこっちにもつづいてて、広いのよ。空が薔薇^{ばら}色で、歌も聞こえたの。すごく不思議なところなの。迷路^{めいろ}みたいでね、わたし、迷子になったのよ。うそじゃないの、その中で拾った髪飾^{かみかざり}り、ちゃんど持ってきたわ。ピンク色の髪飾りよ。……見せようか？」

「うん」

そこでフー子は、大切にくるんできた珊瑚^{さんご}の髪飾りを手さげから出すと、マリカにそつとわたした。マリカは喜んで受けとると、すぐ頭にさしてみて、

「似合^{にあ}う？」

とたずねた。フー子は、あつと思った。拾ってから今まで、さしてみるなど、D 思いつかなかったのだ。フー子は、マリカのすることに驚いた。

珊瑚の髪飾りをつけたマリカが、にっこり笑っている姿は、息をのむほど美しかった。

「ああ。この部屋に鏡ないのかなあ。あ、あった！」

マリカは、ひらりと立ちあがると、窓の横にかかった鏡を見ようとして、妖精^{まじか}がするような格好で、つまだちをした。そして、満足そうに、クスツと笑った。光が髪にふりかかり、金色に見えた。

マリカを見ていたフリー子は、あの園の中に入りこんだときにおそってきた、あの言い知れぬ、惹きつけられるような感覚に、再びとらえられているのを感じた。忘れていた夢が、急にくつきりとよみがえったかのようだった。あの中にひそんでいた、このうえもなく魅惑的な何か。それと同じものを、今、感じる。ああ、これだ、この感じだ……。何とくらくらするんだろう……。

(マリカって、あちら側の子なんだ)

フリー子は、不意にそんなふうに思った。

「ねえ、それで、どうしたの？」

マリカが振りむいて、物憂い調子で先を促した。

フリー子は、夢から覚めるようにハッとすると、

「あ、ああ……。それだけ」

と答えて、それ以上のことを言うのをやめた。

「なんだあ、終わりなの？」

とマリカはすねたように言った。

たった今のがなかったら、フリー子はマリカに失望し、腹を立てていただろう。人は必ずしも、こちらの期待したとおりの反応を示すわけではない。それはわかっていても、こんな話をしている最中に、髪飾りをつけて鏡を見るなんて、ずいぶん失礼なことだった。だが、マリカはもう、フリー子にとっていっしょに秘密を探っていく仲間ではなく、探っていく秘密そのもの変わったのだった。だから失望などしない。

(マリカがちっとも驚かないのは、きつとそういうわけだ)

とフリー子は、ぼんやりと考えた。それがどういうことなのか、わからないままに。

「今の話、秘密なんですよ。あたし、ちゃんとないしょにしてるわ」

マリカはそう言って、髪飾りをフリー子に返した。花に変わる懐中時計を見てみたいとも、園の中に入ってみたいとも言わなかった。それでもフリー子は、少しも失望しなかった。

「フリー子ちゃんが、秘密をおしえてくれたから、あたしもフリー子ちゃんに、だいじなものを見せてあげるね。でも、ほんとは、秘密をおしえてくれ

なくたって、見せるつもりだったんだけど」

マリカはそう言うのと、部屋を出てすぐに戻ってきた。驚いたことに、大きな人形を抱いていた。

「かわいいでしょ？ ジャスミンちゃんっていうの。旅行のときは、必ず連れて歩くんだ」

マリカは、人形の髪を撫でながら言った。

（何なんだろう、マリカって……）

十二歳にもなって人形を抱えていることに、フー子はあきれた。だがマリカは特別だ。

「どうしてジャスミンっていうか、おしえてあげるね」

そしてマリカは、頼みもしないのに、映介の本棚から植物図鑑を取りだすと、

「ええと、ええと、どこだっけ……」

とつぶやきながらページを捜し、フー子に示した。

フー子はそこにある花を見て、思わず息をのんだ。あの園の中で香りながら咲いていた、可憐な花が描いてあったのだ。

「ジャスミンで書いてあるでしょ？ でも、日本語でいうと、マツリカなの。漢字だと、マリカとも読めるのよ。つまり、あたしの名前を外国風につけてあげたわけ」

『ジャスミン…和名マツリカ（茉莉花）』

（あの花は、マリカなのか……！）

でもフー子は、そのことを口に出せなかった。だが、わざわざ人形などを連れてきて、こんなことを示してみせたのは、あの園のことを知っているのと匂わせるためではないのか。

（わたしを釘館に誘ったのはマリカだ。マリカって、いったい何なのだろう……何もかも知っているのだろうか……）^⑧

フー子の頭がぐらぐらした。それでもさりげなく、本のページを一枚めくった。するとそこに、まさに、あの時計の花が描かれていたのだった。『時計草』という名前が付されていた。

問一 — 線①「面はゆく」について、次の問いに答えなさい。

(1) — 線①の意味としてもっともふさわしいものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 照れくさく イ ほこらしく ウ 後ろめたく エ 腹立たしく オ 好ましく

(2) 誰が誰に対して「面はゆく」感じているのですか。次の中からもっともふさわしいものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア フー子がマリカに対して イ フー子が映介に対して ウ マリカがフー子に対して

エ マリカが映介に対して オ 映介がフー子に対して

問二 — 線②「ささやくように言った」とありますが、この時のフー子の気持ちとしてもっともふさわしいものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 悪いことが起こりそうな気がして、ときどきしている。

イ 大事な話なので緊張しつつも、期待に胸をふくらませている。

ウ マリカの態度にとまどい、不安におしつぶされそうになっている。

エ 何気ない話題から入ってマリカの緊張を解こうと、気づかっている。

オ 誰かに聞かれないかと怖^{おそ}いづき、それを必死にかくそうとしている。

問三 「X」に入る語としてもっともふさわしいものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 優等生っぽい イ うそっぽい ウ 理屈^{りくつ}っぽい エ 大人っぽい オ 飽^あきっぽい

問四 A D に入る語としてもっともふさわしいものを、次の中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。(ただし、それぞれの

記号は一度しか使えません。)

- ア かなり イ やっぱり ウ さらに エ まるで
オ もし カ いかにも キ とうとう

問五 ——線③「目を見るばかりだ」とありますが、この時のフー子の気持ちとしてもっともふさわしいものを、次の中から一つ選び、記号で

答えなさい。

- ア 映介の部屋を注意深く観察して、知識を吸収しようとしている。
イ 映介の趣味の世界に引きこまれないように、用心している。
ウ 映介の部屋のあまりの散らかりように、あきれている。
エ 映介の趣味から映介の上品さが伝わり、あこがれている。
オ 映介の趣味がはば広いことに驚いて、感心している。

問六 — 線④「何かまったくちがう感覚でものを考える相手と向きあっているような気がした」とありますが、なぜですか。次の中からもっと

もふさわしいものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 色とりどりの蝶を並べてつくられた模様は、年齢や性別を問わず誰にでも好かれるもので、フー子には『じじい』の悪趣味とは感じられないが、マリカは、『じじい』は蝶ちよの模様のスカートははかない、刺繍したバッグを持たないなどと言って、蝶ちよの美しさを素直に理解しようとしなから。

イ テーブルクロスのような美しい模様を作る蝶ちよも、標本箱に縦横に並ぶ蝶ちよも、どちらも生き物を殺して並べたものであり、フー子には『じじい』の悪趣味としか感じられないのに、マリカは美しい模様のように並べられた蝶ちよの方を、特に良いものとしてほめるから。

ウ 死んだ生き物を美しい模様のように並べていくというのは、気味の悪い『じじい』のすることであり、フー子には『じじい』の悪趣味であると感じられるが、マリカはきれいであれば何でもよく、その美しい模様が死んだ生き物で作られているという点は全く気にしないから。

エ 生き物を殺して並べるのは気味の悪い『じじい』のすることであり、フー子は、誰かに勧める気には到底なれないのに、マリカは、円を描くようにきれいに並べられた蝶ちよをきれいな模様としか考えず、映介の趣味などお構いなしに、映介に蝶ちよの標本作りを盛んに勧めているから。

オ 蝶ちよの収集は『じじい』の趣味であり、決して若者のすることではないとフー子は思っているのに、マリカはテーブルクロスのように並べられた蝶ちよの写真が大変気に入っていて、まだ若い映介に、蝶ちよの収集とそれを美しい模様に見えるように並べることを勧めているから。

問七——線⑤「マリカとのやりとりが、なんとなくしっくりこないように感じながら」とあるが、なぜ「しっくりこないように感じ」たのですか。その理由としてもっともふさわしいものをマリカの言動に注目しながら、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア フー子が、それまで秘密にしていた不思議な体験について教えようというのに、マリカは「どんなこと？」とあっけなく聞いたり、靴下のフリルばかり気にしていて、フー子の話にあまり興味を示さないから。

イ 不思議な体験の謎を解く懐中時計について、フー子は自分だけが知っている秘密だと思っていたのに、マリカが知っていただけでなく、それを「この家のおじいさんも持つてるわ」と言われてしまったから。

ウ 不思議な体験の謎を解く懐中時計が、ひとりでに開き、花に変わったという不思議について、マリカはこわがるのではないかと心配していたのに、「へえ、おもしろいねえ」と興味をもってくれたから。

エ フー子が懐中時計の話マリカにした時、マリカは全く興味を持っていなかったのに、不思議な庭の話をしたとたん、「入って見たの？」と急に強い関心をもってフー子の話を聞き始めたから。

オ それまで親しげに話していたのに、フー子が不思議な体験の話をするとうマリカは靴下のフリルをいじりだし、フー子と目を合わせないようにして、いらだちをかくしている様子だから。

問八——線⑥「この感じ」とありますが、「この感じ」を言い表している部分を文中から十八字でぬき出し、始めと終わりの三字を答えなさい。

問九——線⑦「それでもフー子は、少しも失望しなかった」とありますが、どうしてですか。自分の言葉で説明しなさい。

問十一—線⑧「何もかも知っているのだろうか」とありますが、フー子がこのように思ったのはなぜですか。次の中からふさわしくないものを一つ選び、記号で答えなさい。

- ア マリカの名前が、「あの園」の中で咲いていた花と同じ、「ジャスミン」という意味だったから。
イ そもそもフー子が汀館に来たのは、フー子の意思ではなく、マリカの誘いだったから。
ウ マリカが旅行のとき必ず連れて歩くという人形を、ジャスミンと紹介してみせたから。
エ 珊瑚の髪飾りをつけたマリカに、「あの園」で感じた感覚と似たものを感じたから。
オ マリカが図鑑のページをめぐったところに描かれていた花は、「時計草」という名前だったから。

〔三〕

次の—線部について、カタカナは漢字に、漢字はひらがなに、それぞれ直しなさい。

- ① 外に衣服をホす。
- ② 模試で良いセイセキを残した。
- ③ 農民が田畑をタガやす。
- ④ ヘンキョウの地を旅する。
- ⑤ 山際に雲がかかっている。
- ⑥ 新しい職業に就く。